

キリスト教史学会報

東日本大震災二周年

東日本大震災より二年になる。キリスト教史学会としてもこの震災を記憶に留めたく、東北仙台におられる会員に震災の体験を記して頂いた。震災に関わるキリスト教史として記録に加えたい（五十音順）。

〈信仰の復興〉を求める祈り

—— 東日本大震災から二年

宮城学院中学校・高等学校 今高 義也

東日本大震災から二年が経過しようとしている。この間、奉職する宮城学院にも多くの支援と激励が寄せられ、大きな励ましを受けてきました。被災者の一人として改めて感謝申し上げます。

去る二〇一三年一月二〇日の午後、所属する日本キリスト教会仙台黒松教会で、仙台キリスト教連合主催の「初週一致祈祷集会」が行われました。「仙

台キリスト教連合」は、仙台とその近郊にあるカトリックとプロテスタントの諸教派からなる、超教派の祈りの群です。その主催する祈祷集会にはもう一つ、八月十五日に近い主日の午後に行われている「平和祈祷集会」があります。震災からわずか一週間後の三月十八日に立ち上げられた被災支援ネットワーク「東北ヘルプ」の母体となったのも、この祈りの群でした。

長老派の教会堂で、バプテスト教会の牧師が語る説教に、シスターの姿を含む様々な教会から集った老若男女が耳を傾け、被災地の復興と日本政府の針路のために祈りを捧げる集会に出席して、震災のもたらした甚大な傷みが期せずして〈公同教会〉信仰の覚醒をもたらししていることを実感しました。実際、前述の被災支援のネットワークが契機となり、例えばNCC（日本キリスト教協議会）系の教会・団体とJEA（日本福音同盟）系の教会・団体が共に祈り合う「東北日・韓キリスト者信仰回復聖会」も開催されました（二〇一一年一月三日、会場は日本基督教団仙台青葉荘教会、福音派の韓国人宣教師の呼びかけたという）。それは「被災地にあるキリスト者の信仰が支えられ強められることを願う、

〒108-8636 東京都港区
 白金台1-2-37
 明治学院大学内
 キリスト教史学会
 発行者 大西 晴樹
 振替 00210-8-5913

目次

東日本大震災二周年

〈信仰の復興〉を求める祈り——東日本大震災から二年	今高 義也	1
被災地からキリスト教史への記憶として	川上 直哉	2
東日本大震災復興祈念会堂の誕生	宍戸 朗大	3
東日本大震災より二年	出村みや子	4
「東日本大震災を憶えて—被災地に住む大学人として—」	原口 尚彰	5
英語版『草津「喜びの谷」の物語』について	中村 茂	5
松本富士男さんを想う	荒井 献	6
追悼 矢島浩氏逝去	花島 光男	7
東北アジアキリスト教史学協議会 第八回大会「キリスト教と社会変動」報告	渡辺 祐子	8
東日本部会報告/学会報告/事務局連絡	岡部 一興	9
寄贈図書目録/編集後記		10

字義通りの意味での『リバイバル集会』であったと伝えられています(「東北ヘルプ」ホームページ)。カトリックとプロテスタント、教会派と社会派・福音派、そして日・韓の枠を超え、〈傷む者〉に寄り添い祈る〈聖霊の交わり〉が、震災を契機として東北の各地に起こされつつあります。

ところで先日、日本最古の木造建築教会とされる旧石巻ハリストス正教会会堂(一八八〇年建造、石巻市指定文化財。一九七八年の宮城県沖地震で被災し北上川の中州に移築復元されていた)が、今回の津波で二階屋根部分まで浸水しながらも、奇跡的に流されずに残っていたことを知りました。震災から一年半を経た二〇一二年九月、「旧石巻ハリストス正教会復元市民の会」が立ち上がり、募金活動を始めていくとのこと。気仙沼をはじめ流失した沿岸部の諸教会も〈復活〉を目指して立ち上がりつつあります。

大震災から二年。「我は聖霊を信ず／聖なる公堂の教会／聖徒の交わり／罪の赦し／身体の復活／永遠の生命を信ず」との使徒信条は、〈信仰の復興〉を願う被災地の教会にとって、一層切実な響きを帯びているように思われてなりません。

被災地からキリスト教史への記憶として

日本キリスト教団仙台市民教会 川上 直哉

二〇一一年三月一日に起こった震災に対し、キリスト教界が執った対応について、以下、後世の「キリスト教史」のための資料として、想起される範囲で仙台から見た様子を記し、その総括を行う。

1. 震災直後

当初、各教会は信徒の安否確認に追われた。他方で、一九六〇年代より継続して結束を持ってきた仙台キリスト教連合は、その世話人の震災関連死をきつかけとして、支援活動組織「被災支援ネットワーク」を立ち上げた。このネットワークは「東北ヘルプ」と呼ばれることになった。三月一八日のことである。筆者はその事務局長の任を担った。

国内外の支援団体は、直後からその活動を活発化させた。教会がその受け皿となった。東北ヘルプはその連絡調整を担いつつ、募金を集めて一時見舞い金を全ての被災教会に送付した。

四月、身元不明者の弔いを念頭に、東北ヘルプは仙台仏教会と共に、宮城県宗教学法人連絡協議会の下「心の相談室」を立ち上げた。

「心の相談室」の相談事業のために、東北ヘルプは反貧困みやぎネットワークとの協働を開始した。後に東北ヘルプ事務局長は同ネットワークの代表代行となる。

2. 三ヶ月後から一年

四月・五月と、WCC系列の支援団体はソウルに

二度の国際会議を開催した。東北ヘルプもそこに参加した。世界の支援団体は、支援を日本キリスト教協議会(NCCJ)にまどめ、東北ヘルプに現地の受け皿となることを求めた。この要請を受け、東北ヘルプは財団法人を設立し、支援を被災地へつなげる活動を始めた。また、外国人被災者支援センターと食品放射能計測所、そして諸宗教間連携のための制度作成・人材育成に当たる東北大学寄附講座を設立した。

3. 二年目

東北ヘルプは、引き続き上記支援活動を継続しつつ、福島県キリスト教連絡会や日本基督教団東北教区、そして日本聖公会と連携し、福島県でのアドボカシー活動を開始した。

特に東北ヘルプは、韓国で行われる世界教会協議会(WCC)総会を念頭に、福島の現状を国際社会に伝える活動に携わった。二〇一二年八月にはニューヨークの教会と共にWCCのブリス展示を行うことを決め、同年九月には韓国基督教協議会(NCCK)と協働の催事を仙台で行い、同年一〇月には福島県下の牧師の声を集める催事に関わり、同年十一月にはアジア教会協議会(CCA)のコンサルテーション・ミーティングに参加し、同二月にはNCCJ等が主催した国際会議の現地担当者の任を担い、二〇一三年一月には米国合同メソジスト教会主催のワークショップに参加し、二月には日本福音同盟(JEA)と共に韓国へ一三名の被災地の牧師を伴うツアーを実行した。

4. 総括

(1) 多元主義的ではない協働

プロテスタント、カトリック、正教の三者が相互に協力し合うこと、また、諸宗教者が協働することが、今次の震災対応において成立した。その際、多元主義的によるのではなく、むしろ自らの宗教への確信に従って、しかし他者を尊重しつつ、被災者を接点として、諸派・諸宗教の一致が成立したことが、注目されるべきものと思われる。

(2) 宗教の公共的役割

死者への儀礼あるいは見返りを求めない奉仕等、宗教者ならではの働きに公共的な役割があることが確認された。それは、「自勢力の拡張」と切り離された宗教の公共的役割のあること、無力さの中に佇む力を有する宗教の価値を、宗教者自身が確認する機会となった。このことを契機として、宗教者は宗教者として自らを顕示しつつ公共空間に役割を持つことができた。

(3) 行政及びその他公共セクターとの協働

上記の公共的役割は行政及びその他公共セクター（医療や福祉等）との協働を可能にした。とりわけ、諸宗教の協働は社会的信用を獲得する際に大きな役割をもった。

(4) 宗教施設の価値

寺院・神社・教会などは、支援センターとして物資の配給所となり、また、避難所となった。宗教施設がこうした役割を担い得るということを変更して確認し、宗教施設が有事に活用されるよう行政と平

時から連携を持つことで、災害支援への備えに厚みを与えることができるものと思われる。

(5) 様々なネットワークの連携

各宗教は異なる形式のネットワークを有している。神社は地方自治の最小単位である町内会等と密接であり、寺院は檀家制度によって別の形で地域と結びつき、キリスト教は全国・全世界と直結している。これらのネットワークが相互に結び合うことで、地元に着しつつ世界と直結する連携が可能となった。今後、福島状況への対応において、この「密着」と「直結」が両立することが必須になってくるものと思われる。

(6) 遺産の活用

今次の災害において見られた協働の背後に、一九六〇年代以降の諸宗教間対話とエキュメニカル運動の遺産があることを特記したい。また、諸宗教間連携が東北特有の宗教的資産の活用を目指したことは、重要である。その展開は、キリスト教のインシアチブで進められた。それは、キリスト教の歴史の薄さに基づく「しがらみのなさ」があった故である。地域に密着した伝統の厚みと、世界と直結している自由さが重なり合う時、遺産は活用される。このことが、今次の災害においてキリスト教界が携わった災害支援活動から知られた。